

種々測定原理による自動血沈測定器の比較

吉田 恭教, 浦西 さよみ, 三谷 典映, 片岡 美香, 倉本 智津子, 丹羽 欣正
増谷 喬之, 岡本 康幸 (奈良県立医科大学附属病院)

【目的】

迅速血液沈降速度計は従来法であるWestergren法に比べ、検体量が少ない、感染の危険性が低い、手技が簡便、測定時間が短い、大量処理が可能など多くの優れた特徴を有している。しかし、機種間による測定特性の差は大きなものがあり、機種間差となっている。今回、その基礎的検討を行った

【対象・方法】

本院、入院および外来患者 223例で血沈検査の依頼された検体を使用し、用手法としてWestergren法。測定機種はVes-matic20(Ves)、モニター 100(モニター)、ESR-Quick15(Quick15) を用いた。

【結果】

モニターにおいて1時間値の回帰式を次に示す。用手法とモニターは、 $y=1.04x+3.66$ $r=0.972$ 用手法とVesは、 $y=1.10x+10.43$ $r=0.957$ Vesとモニターは、 $y=0.91x-4.37$ $r=0.979$ であった。Vesが全体的に高値傾向を示したが相関性も良好であった。しかしながら、

140mm以上を示した9例ではモニターの方が高値傾向を示した。又、Quick15と用手法との1時間値の相関も $y=1.10+3.10$ $r=0.955$ と良好であった。3機種の3回の同時再現性も良好であった。

【結語】

機械法はサンプル量の少量化、および多数検体処理に適している。

室温等、測定条件に影響されにくい。

時間短縮により、迅速検査としても期待できる。

0744 22 3051 内線 4204